

教育

アメリカの学校は平均して9月第一週に始まり、6月上旬に終了する。冬休みは短く、普通クリスマス前日から1月1日までである。冬休みはかつてクリスマス休暇と呼ばれていたが、最近はイスラム教徒、ユダヤ教徒などのキリスト教徒以外の宗教人口が激増の為、公立学校ではクリスマス休暇という言葉避け、**Winter Recess** とか **Winter Break** と称するのが慣例になって来た。大学を除いて週5日制である。夏休みは約3ヶ月間の長期にわたるが教育年度が終了してるので宿題はなく、アメリカの子供たちは3ヶ月間、頭を休める。この為、9ヶ月間に学んだ殆どの事を忘れてしまい、9月と10月は前学年のおさらいをしなければならない。これがアメリカの教育のレベルが世界の先進国中最も低い理由の一つとなっている。この3ヶ月間の学校休暇は植民地時代の農繁期のなごりである。

公立校は平均して5・3・4制をとっている。6・3・3制から実践的に変化したものであって、連邦政府が規定しているものではない。州によっては6・3・3制を固守し、それに基づいて校舎・施設を経営管理している州もある。一般に小学校は1年から5年まで。6年から8年までは中学校（**Middle School**）で高校は9年（日本で言う中3）から12年までの4年間を言う。高校は義務教育であり、無料。したがって高校入試はないし、高校へ入る目的とする為の塾は極めて少ない。

アメリカは日本の様に教育庁が認定する検定済教科書はなく、学年毎の教科書はない。日本は北は北海道から南は沖縄まで一様な学年に応じた教科書を使用するが、アメリカは小学校（1年から5年まで）の教科書は算数とか国語（英語）に於いては7段階ぐらいに分かれているものを使用する。教科書は生徒に無償で配布されるが、年度末には学校に戻す。教科書は5年から10年間ぐらい再使用する。

幼稚園教育を義務化している州では、幼稚園の段階でエリート式に子供たちを学力別に分ける。高校になったらこの差は更に広がる。これは凄い！実に凄い仕分けをする。しかし実に合理的、実践的な仕分けをする。これは公立学校に於ける実態である。日本では教育の均衡、平等を図る為に全ての子供たちは全く同じレベルの教科書にて授業を行なうが、アメリカではそんな事はしない。小学校の一年から仕分けをさせられるのだから、中1（小学6年）の段階では大体3つか4つのレベル別のクラスに分けられる。この段階で少なくとも学年のトップ20%以内にはないと高校卒業まで学力的に追い越す事は困難になる。一般に算数、数学のレベルで生徒のクラス分けをする。それは平均してアメリカ人は数学に弱いからである。しかし、高3（12年生）でトップ5%内に属する生徒達は大学レベル（教養課程）の数学（微分、積分、確率）や物理、化学の教科書を使うので、大学へ入った段階で同じレベルの教養科目を免除されるのみならず、習得単位に還元出来る。この為に半年、又は一年も早く大学を卒業する学生も出て来る。

日本では高校入学の段階で仕分けする。工業、商業、農業、普通過程等と分けて受験を施し、この段階で将来の道が半ば決められる。更に高等専門学校がある。アメリカでは高校は全部普通科。しかし、高卒後の進路の為に多くの選択科目がある。高校卒業後職

業訓練的な専門校があるが、これは短大ではない。普通一年か二年のカリキュラムで高卒生や一般社会人の就職が目的である。

一般にアメリカ人は数学に弱い、その理由として、次の様な事が考えられる：

- 国際基準であるメートル法を使わないで不合理なヤード・ポンド法（これは数少ないアメリカ人の不合理な箇所である）を使っている為、換算が複雑、それだけでなくとも数に弱いアメリカ人であるから、数学に対する劣等感は更に増す。
- 言語的に数字を数える時間が他の言語に比較して時間がかかる。特に 11 から 19 までの発音は日本語の 3 倍も必要とする。口の中でモゴモゴ言ってる内に日本人なら計算が終わっている。
- 貨幣制度にも問題がある。25 セント (Quarter と称して 1/4 ドル) 銀貨を使用する為、貨幣計算に混乱を及ぼしている。10 進法にすら問題のあるアメリカ人、1/4 進法の為に数学的に脳が混乱するのは当然の事と思われる。
- 日本の様に数学の基本『九九』がない。だから計算にもっと時間がかかる。
- ソロバン文化がない。

したがってアメリカ人は数学者に対する尊敬度は高い。私はアメリカの大学で数学で学位を取ったので、卒業後ヴァージニア州で公立校の数学教師になったからチャホヤされてビックリした。しかし、反面、数学者は堅物と思われる事も多いので要注意だ。

又、一般にアメリカの公立小中高校には運動会、学芸会、遠足、文化祭、体育祭、弁論大会、入学式、等はない。高校までは外泊を含む大規模な修学旅行なるものもない。高校 2 年か 3 年になると、修学旅行に類似した海外旅行を施行する高校はある。よくアメリカの生徒の学力の弱さをアメリカの教育者は授業日数（アメリカでは州毎に制定されているが、一般に一年に 180 日が授業日数である）の少なさを理由にするが、日本の学校行事に使う日数を考慮すると、アメリカの方が実際授業日数が多い。又統計的にヒスパニック系統の生徒の平均学力、黒人系統の生徒の平均学力もアメリカ全体の生徒の学力低下度に及ぼしている事実も無視出来ない。

学校参観日は年に一度、普通、学校が始まる 9 月に行なう。ある日、夕方から午後 9 時頃までの間に行なう。しかし実際の授業参観はない。普通、親たちが自分の子供たちの教師に会うぐらいのものである。学年が高くなるにつれて親たちの参加が少なくなるのは日本も同じであろうか。普通、学校の教員が生徒の家庭訪問をする事はない。

通学は親の選択にもよるが、殆どの生徒はスクール・バスにて通学する。日本の様に教師による校外補導なるものはない。問題児は特別校にて授業を受ける。児童生徒が授業妨害等を起こすと、それは校長、副校長の介入となり、教師の務めはあくまでも教壇上での指導が職務であり、帰宅の為に学校を出た段階で教師としての任務は終わる。傷害事件が校内で発生すると、直ちに警察が介入する。最近、特に高校では生徒は金属探知機ゲートを通過して校内に入る。一般に公立学校には制服はないが、最近では僅かながら制服を規定する公立中学校、高校が現れている。

州にもよるが、ニュージャージー州公立学校では10%以上の児童生徒が英語以外の母国語で話す生徒がいる学校では彼らの為にその外国語で授業をしなければならない。これは州条例である。例えばニュージャージー州北部にあるフォート・リー市では日本からの派遣社員の家族が多く住み着いている為、ある学校区によっては10%以上の児童生徒が日本語を母国語としている為、全ての科目を日本語で教えなければならず、日本人教員を採用してる。これを **Bi-Lingual Education** と言い、外国語教育とは異なる。実にリベラル的な考慮であるが、公金の浪費であり、特に日本人児童にとっては英語に慣れるのに日数を要し、私の主観ではあるが良い恩典とは思われない。

PTA なるものは段々と影を潜め、地域の学校区を統合した家庭学校協会 (**Home & School Association**) と称するものが発達して来ており、これは生徒を持つ親達の集まりで、団体的に地域の教育委員会、教育長、校長等と直接の交渉、談判をし、その内容はカリキュラム、生徒補導、生徒仕分け等教育全般にわたる。私は一人息子が高校を卒業するまでの5年間、800人以上のメンバーを有するこの協会の副会長の任にあった。

一般に学校のクラブ活動は活発で、この課外活動成果が将来の大学入学に関与してくる。日本におけるクラブ活動を支える生徒会費のようなものはない。

6月上旬に中学、高校の卒業式は大々的に行なうが、卒業生だけが参列する。卒業式に於ける卒業生代表挨拶は最優秀卒業生 (**Valedictorian**) と準最優秀卒業生 (**Salutatorian**) によって述べられる。最優秀卒業生とは高校4年間で最高 **GPA (Grade Point Average - 全科目成績平均数値)** を取得したもので、アメリカの教育は実にエリート本位であると言っても過言ではない。

アメリカには国立大学は存在しない。あえて言うならば、陸軍大学、海軍大学等の大学だけが唯一の国立大学である。これらの大学に入学する為には国会議員 (上院又は下院) の推薦が必要となる。大学に於ける費用は完全無償で制服までも支給される。

又、大学の優劣番付がメディアによって格付けされる。州立 (公立) 大学がトップ10番に入った経歴がない。大学の番付仕分けは学芸大学系統 (**liberal art - 規模の小さい大学**) と総合大学系統に分けてランク付けを行なう。**World News** の番付によると、最優秀総合公立大はバークレイ市にあるカリフォルニア州立大学で、それでも全米大学中20位である。陸軍・海軍大学はこの格付けからは除外されるが、総合大学として考慮すると、全米25番位に位置するものと思われる。世界ランキングもある。2008年にはハーバード、エール、プリンストン大学が世界のトップ3大学であった時、東大の世界ランキングは第18位だった。日本のトップ大学は入試結果だけで決められる。これが故に東大は世界のトップ大学圏に入れられない所以である。

アメリカの大学は入学試験を施行しない。大学入学は **SAT** と呼ばれる適性検査結果、内申書、推薦書、課外活動記録と面接で決められる。**SAT** は年に数回受験が出来て最高点が希望の大学へ送られる。この **SAT** は小学生でも受験出来る。**SAT** の受験番号は受験生の社会保障番号で登録される。又、課外活動記録は実にクセモノで、**SAT** 数値

が高く、オール A 学生でも、課外活動としての特技が欠けると、これで振り落とされるのだ。入学に関し有名私立大学ではレガシー (legacy) と呼ばれるカテゴリーに所属する志願者は優先的に入学が決められる。このカテゴリーとは、志願者の親がセレブ、親兄弟がかったの卒業生、全米レベルの特技の持ち主等を意味する。エール (Yale)、ハーバード (Harvard)、プリンストン (Princeton) 等のトップのアイビー・リーグ大学はこのレガシー入学は 30%以上と言われている。更にこれらのトップ大学では大学構内色を考慮して、特に東洋系学生の入学に際し、上限規制を行い（例えばエール大では東洋系新入生を 15%以内に抑える）、人種的均衡を図っている。ハーバード大学では全米の高校にランク付けをしていると言われ、つまりランク漏れの高校の卒業生は自動的に合格圏外に落とされるのだ。又、少数派市民優遇法(Affirmative Action) の適用の為、例えば黒人等のアメリカ市民は大学入学に際し有利な立場に立ち、現オバマ大統領もコロンビア大学、ハーバード大学へ入学出来たのもこの恩典を受けたと言われている。ちなみに前ブッシュ大統領がエール大へ入学した時、父親の元ブッシュ大統領が CIA の Director であったのと彼自身エール大卒業生であった。前ブッシュ大統領がエール大在籍中、彼を記憶している同級生もおらず、教授陣も誰も知らず、しかし記録としては彼は C 学生（エール大卒業生としては最低）であったエピソードは余りにも有名である。

公私立とも大学入学に際して入学金は徴収しない。又、大学や会社、色々な協会から出される奨学金は膨大で、番付の低い大学は全額支給奨学金を条件に優秀な生徒の勧誘を試みるのが現状だ。